

「2015 POLAND SWISS STAY」 ～復興と平和を考える～ 報告書



協力  日本赤十字社

Support  Our Kids
ひとりじゃないよ

12/12 事前研修・日本赤十字社本社 プログラム

- 13:00- 開会挨拶、ご来賓挨拶
- 13:20- 自己紹介
- 13:35- 現地プログラムについて
- 13:35- 生徒課題発表①（ポーランドについて）
- 14:10- 赤十字の人道・復興活動について
- 15:00- 震災プレゼンテーション練習
- 15:30- 海外研修の心得、ケーススタディー
- 16:15- ご来賓挨拶
- 16:30- 生徒課題発表②（スイスについて）
- 17:00- 連絡事項、終了・片付け



12/12
事前研修・日本赤十字社本社
研修



ツィリル・コザチェフスキー
駐日ポーランド共和国大使館 大使



ウルス・ブヘール
駐日スイス大使館 大使



日本赤十字社 企画広報室 室長
松崎 政治 様



スイスインターナショナルエアラインズ
日本支社長 岡部 昇 様

研修中のメッセージより

「皆さんが、ポーランドに行かれることを大変嬉しく思っています。第一次世界大戦後、日本と日本赤十字社が、シベリアに抑留されていたポーランドの孤児を救ってくれたことに、ポーランドは今でも深く感謝しています」
ツィリル・コザチェフスキー 駐日ポーランド共和国大使館大使

「ポーランドの次に、スイスに来られることは素晴らしい経験になると思います。なぜ、アウシュビッツであれほどの悲劇が起きたのか、その答えを探す鍵のひとつは、赤十字に行くことで学べると思います」
ウルス・ブヘール 駐日スイス大使館大使

「我々・赤十字のスローガンは、「人間を救うのは、人間だ」ということです。皆さんは震災という厳しい経験をなさった。これから自分たちが、そのことを他の人に役立てるようなことをしていただきたいと思います。そういう中で、人を救うということをいろいろと考えながら、伝え方というものを学びながら、研修を過ごしていただきたいと思います」

松崎政治 日本赤十字社 企画広報部 部長

12/12
事前研修・日本赤十字社本社
見学・講義～赤十字の人道・復興活動について～



日本赤十字社 企画広報室
森 遼太郎 様



アンリー・デュナンの創設の動機、
日本赤十字設立の歴史、現在の活動などについて、
展示を見学。シベリアのポーランド孤児の資料についても
ご説明いただく



日本赤十字社 東日本大震災復興支援推進本部
岩田 和則 様



赤十字の歴史、義援金の仕組みなどについての
講義を受けた後、研修の目標や想いを発表する生徒たち

生徒たちの感想発表より

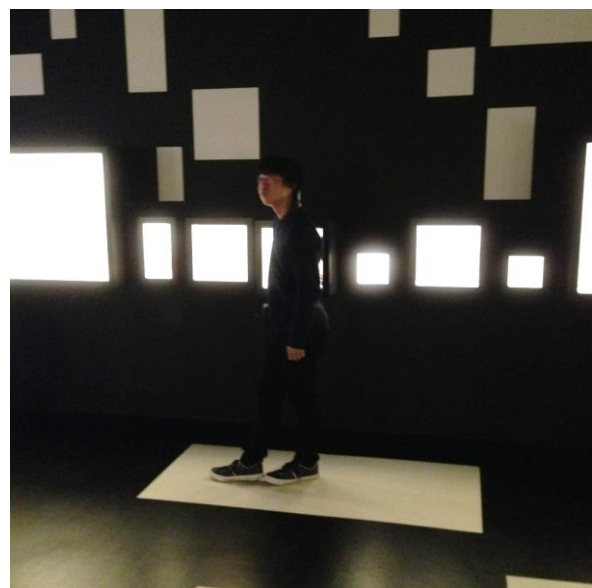
「震災のとき、大きなテントを張って、いろいろな人の救護に当たっている沢山の人を見てきました。赤十字の方々の助けがあって、被災地は、段々復興に近づいているんだと思います。明日から私たちはポーランド・スイスに行きます。本部があるスイスや、アウシュビッツを訪れて、復興・平和についてしっかり学んできたいと思います」

渡辺理央（仙台育英学園高校3年）

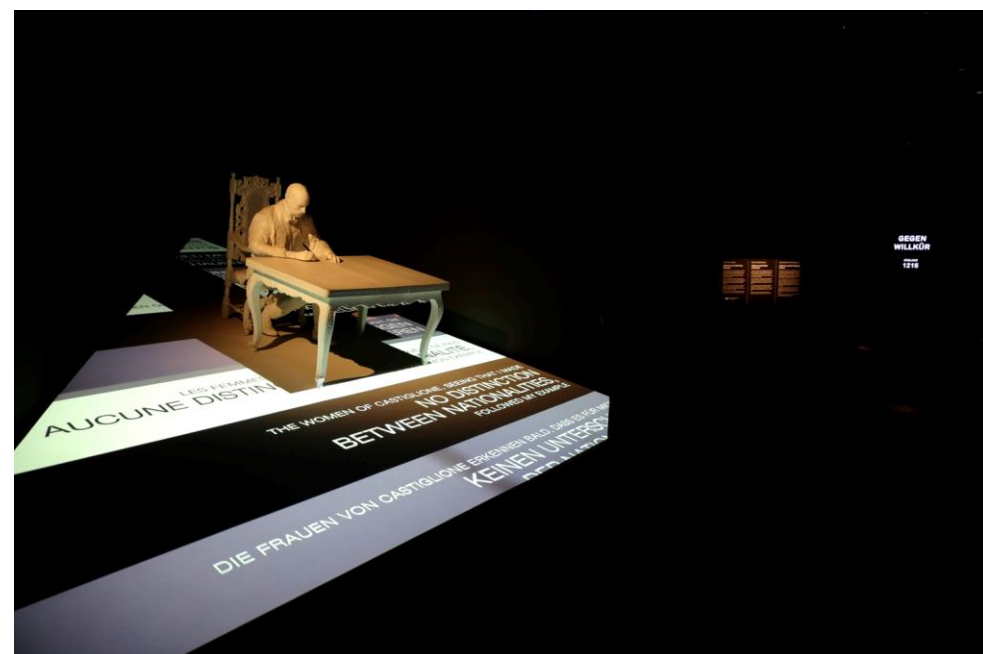
「忘れないこと、しっかり心に刻んでおくこと、伝えることの大切さなど、今日教えていただいたことをふまえて、震災復興や世界平和のことを考え、いい研修にしていきたいです」

高橋佳弘（仙台高等専門学校3年）

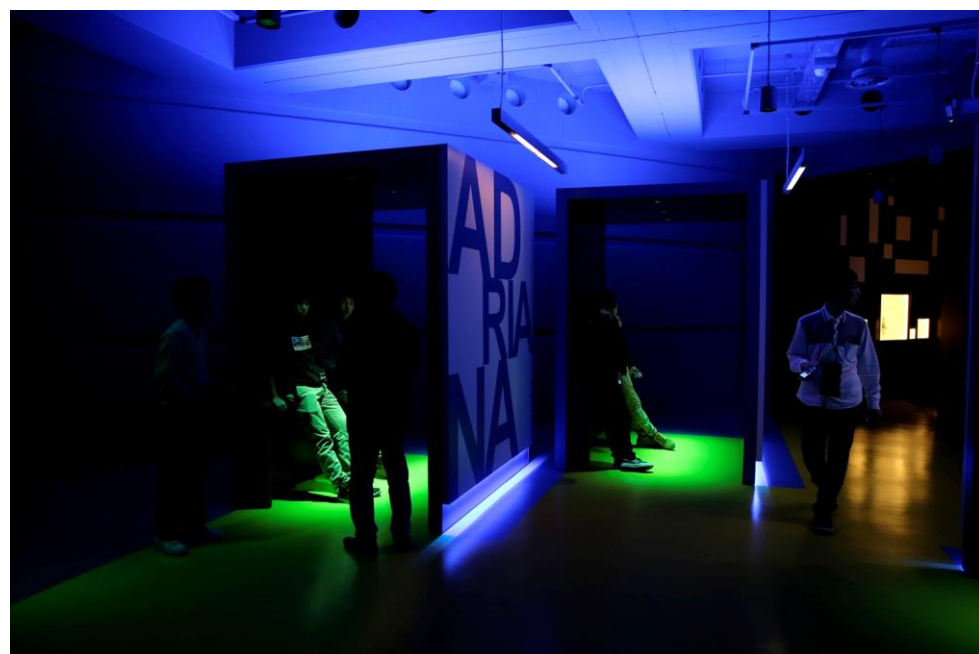
12/23 スイス・ジュネーブ 「国際赤十字・赤新月社博物館」見学



「国際赤十字・赤新月社博物館」をじっくりと見学。
赤十字の多方面にわたる活動を学びながら、「復興と平和」について考えた時間



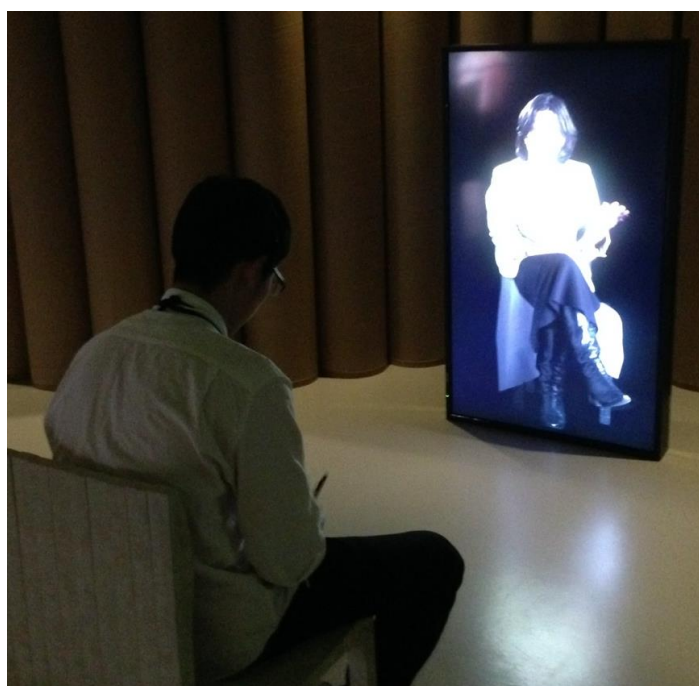
「ソルフェリーノの思い出」からの
アンリー・デュナンのことば



アート性の高い写真・映像・立体模型など
様々な手法でわかりやすく展示されている各ブース



アンリー・デュナンの
貴重な絵画も期間限定の展示



映像から流れる様々な方の証言を
聞きながらメモをとる生徒たち



紛争地における人質への
家族からのメッセージが聞けるブース

12/23 スイス・ジュネーブ 「国際赤十字・赤新月社連盟本部」訪問・震災プレゼン

【スケジュール】

14:00～ IFRC内の見学。IFRC概要と活動について。質疑応答

(Sayaka Matsumoto様/Grants Coordinator Strategic Partnerships and International Relations Departments)

14:30～災害対応に関わる仕事について。質疑応答

(災害対応チーム・Cash Distributionご担当者、Disaster Relief Emergency Fundご担当者)

15:15～生徒からの震災プレゼンテーションと意見交換

15:45～記念写真、訪問終了



「国際赤十字・赤新月社」の取り組みについてのレクチャー



移転前最終日の館内を案内していただく



「支援した方々が実際に本部に来て、実際はどうだったのかを聞く機会は少ない」とのことで、災害対応チームの方から具体的な質問を沢山していただく

10回目の集大成としての震災プレゼン

12/23 スイス・ジュネーブ 「国際赤十字・赤新月社連盟本部」訪問・震災プレゼン



■生徒へのメッセージより

「震災時は、皆さん、まだ小さかったと思いますが、今、こうして海外に来て、英語で自分の経験を伝えられるというのは、皆さんも頑張ったんだと思いますし、大人の方が導いてくれたこともあると思います。そのことを忘れず、是非、これから、世界の未来のために活躍してください」

Sayaka Matsumoto/Grants Coordinator Strategic Partnerships and International Relations Departments

「最近でもネパールの地震など、沢山の被災された方がいらっしゃいますが、こういう経験をしたということをジュネーブに来て、私たちに直接伝えてくれる方は、そんなにはいらっしゃいません。被災された経験はなかなか話にくいことですし、非常に個人的な体験だとは思いますが、皆さん、オープンに話していただいて、私たちにとっても貴重な時間でした」

災害対応チーム・Cash Distributionご担当者

■生徒からの感想より

「ジュネーブでこのような機会が持つことができ、嬉しかったです。私たちは、東日本大震災が無ければ、ここにはいないわけで、複雑な気持ちではありますが、震災の復興に頑張ってくれた方々、赤十字の方々に感謝しながら、この経験を大事にして、これから私たちは社会に出るわけですが、復興に貢献できるように頑張っていきたいと思います。今日はありがとうございました」

渡辺理央（仙台育英学園高校3年）

12/23

「国際赤十字・赤新月社連盟本部」 「国際赤十字・赤新月社博物館」見学・訪問レポート



2015年12月23日、我々はスイス西部・ジュネーブにある国際赤十字・赤新月社連盟の本部を訪れた。そこで我々は職員の方々から赤十字社の歴史や活動に関するお話を伺い、赤十字社の活動に対する理解を深めることができた。今回、我々をご案内していただいた職員の方々には、お礼申し上げたい。

さて、今回、我々は職員の方々から様々なお話を伺ったわけだが、その中で1つ強く心に残っていることがある。事後の支援の重要性についてである。災害や飢餓等が発生した際、当然、そこには、発生時、様々な支援が送られる。しかし、その災害が「復旧」したと判断されたとき、そこから大概の支援は徹底する。しかし、その「復旧」は“完全な”ものではない。

道路・堤防が直された、被災住民の住宅が建て直された、そういった「復旧」は完了したかもしれない。しかし、そこに至るまでのプロセスについて、整備の不徹底、それが発生した大もとの要因についての検証・復旧に関する支援は必ずしも終わっていないことがある。そして、また、同様のことが繰り返されていくのだ。

こういったことに対処していくため、国際社会は何をしていくのか。赤十字では、こういったことを見据え、中長期的な計画を作っていくことを支援するらしい。継続的に、その大もとの要因を解消する作業を支援することが、災害の現象につながっていくらしい。

ここで考えたいのは、こういった事を「東日本大震災からの復興」に活かせないか、ということだ。今回の参加者、私を含め6人は、東北の、特に被災三県と呼ばれるところに住んでいる。それぞれの住む地域の状況は違えど、取り組むべき問題はただ1つ、復興だ。現在、様々な復興事業が行われているが、私はそれと同時に、今回は震災において、なぜ、これほどまでの被害が出たか、その要因について考えねばならないと思う。なぜ、今回津波でこれほどの被害者が出たか、またなぜ今回福島第一原子力発電所で事故が発生してしまったのか。そういった部分について、我々はもう少し突き詰めて考え、その要因に関する対策を練るべきではなかろうか。

ただ、ここで注意しておきたいのは、大もとの要因に対する策の構築と、一般の復旧工事は両立しなければならないという点だ。今、東北には、震災前の生活を送りたくても送れない人が多くいる。

そういった人々への生活援助はむしろ優先しなければならないし、そういった人々が生活を再構築してく際には、我々が考えていった論を用いねばならない。

この事を実行するには、様々な辛苦がつきまとうであろう。それは予想するものではないし、とてつもなく苦しいものかもしれない。しかし、我々は決して諦めてはならない。これを克服せずには、真の復興はあり得ない。

東北出身の偉人の一人に、宮澤賢治がいる。彼は多くの有名な小説・詩を書いたが、中でも特に有名な作品に「雨ニモ負ケズ」がある。彼はそこに奉仕人としての自らの理想像を描いたが、実は彼こそがその理想の奉仕人だと私は考える。不屈の精神、ありあまる程の行動力、そして、故郷への熱い思い……。そのような人に、私はなりたい。

作山龍馬 (福島県いわき秀英中学校3年)

12/23

「国際赤十字・赤新月社連盟本部」 「国際赤十字・赤新月社博物館」見学・訪問レポート



今日はジュネーブにある国際赤十字の博物館に行ってきました。赤十字の活動の内容を分かっていたつもりでしたが、ここへ来て自分は全く知らなかったんだなと思い知らされました。沢山の展示がある中、僕が一番衝撃を受けたのは、赤十字が行っているラジオの活動でした。紛争地で人質となった人に対し、その家族の人達のメッセージを伝えるためのものでした。博物館の説明アナウンスは、本物の現地の人々の声と重なって聞こえてきて、その人のあせりや悲しさが手に取るようにわかったため、思わず瞳に涙がためていました。こんな人々が今もこの世界にいるのかと思うと、自分が今している何不自由のない生活を感謝せずにはいられませんでした。

畠山拓己（岩手県立宮古高等学校1年）

国際赤十字博物館では、災害に対する予防として、周りに知らせることの重要性を感じました。私の故郷では大きなスピーカーがありましたが、地震で壊れてしまい、周りの人に知らせることができていなかったことを思い出しました。国際赤十字連盟本部では、私たちの発表にとっても興味を持ってもらい、その上、「わざわざジュネーブまで来て発表してくれてありがとう」と言ってもらいました。国際赤十字連盟の本部に行き、震災のことを発表することはとても素晴らしい経験になりました。

高橋佳弘（仙台高等専門学校3年）

今日は国際赤十字・赤新月博物館に行きました。そこで国際赤十字を創設したアンリー・デュナンについて学びました。戦争などで人権を踏みにじられた歴史を物語る写真やジュネーブ条約原本などの貴重な資料の数々。世界各国で人類を守る活動を続ける赤十字ならではの展示を見ることができました。午後のプレゼンでは、しっかり伝えることができました。あらためて震災の経験を伝えていくことの大切さが分かりました。若いうちに震災を経験した自分たちは、決して良いことではないけど、震災があったから学ぶことが沢山ありました。小学6年生だった自分が今こうやって、海外で英語でプレゼンをしていると思うと、少しは成長したんだなと思います。残りわずかのステイですけど、もう一度感謝の気持ちを持って過ごしたいと思います。

佐藤章哉（福島工業専門学校2年）

ジュネーブの街並はチューリッヒとベルンとはまた違い、都会らしさとヨーロッパ風の混ざったモダンな街だった。午前中に国際赤十字博物館を見学した。出発前に、ウルス・ブヘール、スイス大使が「なぜアウシュビッツであれほどの悲劇が起きたのか、その答えを探す鍵のひとつは、赤十字にあると思います」と仰っていた。展示の中からそのひとつを見つけた。第1回ジュネーブ条約は、兵士にしか適応しておらず、民間人に対して保護ができず対応が遅くなったということだった。そのことから、新しいジュネーブ条約が定められた。過去の経験を通して、現在、様々な分野で大きな成果を上げ続けている赤十字の活動。私もできるボランティアをしていきたい。午後は国際赤十字本部にて最後のプレゼンを行った。個人的には一番伝わっていたと思う。これでステイ中のプレゼンは終わったが、今後の課題として、これからも「相手の立場」でプレゼンをして、分かりやすく伝えるように努力していきたい。

小田和樹（岩手県立久慈高校2年）

全体行程表・プログラム

日 程			午 前	午 後	宿 泊
DAY1	12月 12日	土	12:00 東京駅集合、日本赤十字社移動	13:00～17:30 事前研修（日本赤十字社）震災プレゼンテーション① 17:45 オリンピックセンター移動	東京 （オリンピックセンター）
DAY2	13日	日	07:12 参宮橋駅発 07:15 新宿駅着 07:20 新宿駅発 07:41 日暮里駅着 08:02 日暮里駅発（京成スカイライナー11号） 08:41 成田空港着 11:10 成田空港発（LX 161）	15:50（現地時間） チューリッヒ空港着 17:15（現地時間） チューリッヒ空港発 19:10（現地時間） ワルシャワ・ショパン空港着 ホストファミリー顔合わせ	ワルシャワ （ホームステイ）
DAY3	14日	月	ワルシャワ歴史地区観光 10:00 Novotelセンター、ロビー集合→バス175でセンターから旧市街へ移動、その後歩いて展望台→ワルシャワ歴史地区→キュリー夫人生家→ワルシャワ蜂起モニュメント→無名戦士の墓→ワルシャワ大学→聖十字協会→新世界通り（＊昼食）→旧共産党本部→三十字教会広場 三十字教会広場から大使館までバス移動	14:00 在ポーランド共和国日本大使館訪問 （ナザレ高校交流会、震災プレゼンテーション②） 17:00 ワルシャワ日本語学校訪問（交流会、震災プレゼンテーション③） 18:30 ワルシャワ中央駅ショッピングセンター ホストファミリー合流	ワルシャワ （ホームステイ）
DAY4	15日	火	8:00 ポルコヴツェへ チャーターバスにて移動	15:00 ホテル到着 16:00-18:00 ポルコヴツェ高校訪問（交流会 震災プレゼンテーション④ プレゼント交換） 18:00-19:30 「サンデン工場」見学 震災プレゼンテーション⑤ 20:00 ホテルにて夕食 小田和樹君バースディーパーティー	ポルコビツェ 「AQUA HOTEL」 （ホテル）
DAY5	16日	水	8:00 アウシュビッツへ移動	13:00 「アウシュビッツ・ビルケナウ強制収容所」訪問 16:30 アウシュビッツ出発 18:30 クラクフ到着 ホテルチェックイン 夕食	クラクフ 「APARTAMENTY MUZYCZNY KRAKÓW」 （アパートホテル）
DAY6	17日	木	午前中 クラクフ旧市街散策 12：00 「Manggha」博物館見学	13:00 「Manggggha」博物館にて昼食 14:45 ヤギェウオ大学日本学科 上級生（語学研修とポーランドの歴史、文化紹介） 16:30 ヤギェウオ大学日本学科 1、2年生（震災プレゼンテーション⑥、学生たちとの交流） 18:30 ヤギェウオ大学日本学科 全学部（学生とクリスマスパーティー） 20:00 夕食	クラクフ 「APARTAMENTY MUZYCZNY KRAKÓW」 （アパートホテル）
DAY7	18日	金	9:00 バベル城見学－歴史博物館 講師：宮永匡和氏（ポーランド在住画家） 12:00 昼食（市内レストラン）	13：30 クラクフ電気工業高校訪問 http://www.zsel1.krakow.pl/ （震災プレゼンテーション⑦、学生たちとの交流） 17：30 「Manggha」日本語学校訪問 （震災プレゼンテーション⑧、学生たちとの交流）	クラクフ 「APARTAMENTY MUZYCZNY KRAKÓW」 （アパートホテル）
DAY8	19日	土	10：00 ヤギェウオ大学中近東極東学会参加（震災プレゼンテーション⑨、学生たちとの交流会） 12：00 「Manggha」博物館にて昼食	15:00 世界遺産「ヴィエリチュカ塩鉱」見学	クラクフ 「APARTAMENTY MUZYCZNY KRAKÓW」 （アパートホテル）
DAY9	20日	日	ワルシャワ移動（インターシティ利用）	16:00 アンジェ・ワイダ氏（映画監督）自宅訪問 19:00 ワルシャワ日本語学校パーティ	ワルシャワ 「NOVOTEL」 （ホテル）
DAY10	21日	月	09:40 ワルシャワ・ショパン空港発（LX1343） 11:50 チューリッヒ空港着	ベルン移動 ホテルチェックイン 18:00 ウェルカムパーティ	ベルン 「Youth Hostel Bern」 （ユースホステル）
DAY11	22日	火	ロシニエール地方遠足 11:00 「グランシャレ」（節子・クロソフスカ・ド・ローラ伯爵夫人宅）訪問 17:00 グリュイエール村見学		ベルン 「Youth Hostel Bern」 （ユースホステル）
DAY12	23日	水	ジュネーブ移動 10:00 国際赤十字博物館見学 13:00 昼食	14:00～16:00 国際赤十字社・赤心月社連盟訪問（震災プレゼンテーション⑩） 市街地散策（国連欧州本部など）	ベルン 「Youth Hostel Bern」 （ユースホステル）
DAY13	24日	木	世界遺産「ベルン旧市街」散策	ベルンクリスマスマーケット参加 23:00 ベルン大聖堂ミサ参加（クリスマスコンサート）	ベルン 「Youth Hostel Bern」 （ユースホステル）
DAY14	25日	金	10:00 ベルン大聖堂ミサ参加（オルガン、現地児童の祈り）	チューリッヒ移動 チューリッヒ市街地探索	チューリッヒ 「Ibis Budget Hotel」 （ホテル）
DAY15	26日	土	チューリッヒ空港へ移動	13:00 チューリッヒ空港発（LX 160）	機内
DAY16	27日	日	08:55 成田空港着 10:30 解散式 11:58 成田空港発（京成スカイライナー14号）	12:43 上野駅着、東北へ	

12/13-15 ポーランド・ワルシャワ滞在 「日本大使館」震災プレゼン・ナザレ高校交流会 ホームスティ、「ワルシャワ日本語学校」交流会



ワルシャワ日本語学校



戦災で焼け野原から復興した
世界遺産「ワルシャワ旧市街」を探索



ワルシャワ空港でホストファミリーと対面



日本大使館にて震災プレゼン・
ナザレ高校との交流会

【渡辺理央】・・・ホストファミリーはアダムさん・リサさんと、小学1年生のエミリアちゃんの3人家族でした。アダムさんはアプリ制作の会社の社長さん。エミリアちゃんは僕らが来るのをすごく楽しみにしてくれていたらしいのですが、親の後ろに隠れたりとシャイでした。日本とクリスマスツリーの絵を書いて渡してくれて、一緒に遊んでいるうちに仲良くなりました。

【畠山拓己】・・・ホストファミリーは両親と姉妹3人の家でした。食卓には食べきれないくらいのハム・ソーセージ・サラミがありました。パプリカ・カリフラワー・ラディッシュは生で食べます。「真崎わかめ」をお土産で渡したら美味しいと好評でした。英語もなかなかわからなかったの、「What's this?」という質問作戦を繰り返し続けました。

【佐藤章哉】・・・ホームスティ先はアパートで両親と娘、ペットが犬1匹、猫とハリネズミ3匹ずつの動物園のような家でした。同じ高校2年生のホストシスターのマルタが朝食にパンケーキを作ってくれました。日本が好きということで、ロックバンドや漫画について話をして仲良くなりました。ワルシャワの街並は本当にキレイで感動しました。展望台からヨーロッパ感を実感しました。

12/15 ポーランド・ボルコヴツェ滞在 「SANDEN工場」訪問 「ボルコヴツェ高校」交流会・震災プレゼン



「ボルコヴツェ高校」交流会・
震災プレゼン
クリスマスパーティ



高校内を案内してもらい、
校内のテレビ局からインタビュー



「カーエアコンプレッサー」の世界シェア25%を持つ、海外でも活躍する日本企業「SANDEN」工場内を見学

【小田和樹】・・・早朝、ワルシャワからボルコヴツェへ、悪天候の中、5時間程、バスで移動した。バスの中では昨日の反省を生かしプレゼン原稿の手直しをして過ごした。この日の最初の訪問場所は、ボルコヴツェ高校だった。ワルシャワとは違い少し田舎のボルコヴツェの雰囲気的交流の中にも表れていて、おだやかで優しい人たちだった。その後、プレゼンを行った。話し方・内容・声の調子など、前回から工夫できたと思う。日本の企業であるSANDENの工場も訪問させていただき、エアコンプレッサーの製造工程を見せていただいた。生産ラインはほとんど日本のもので、ポーランドの男性だけではなく、女性も多く働いていた。工場ができた当初は、文化の違い、言語の壁によってかなり苦労したとのことだったが、日本の技術力・品質管理・工程などの良い部分がポーランド人に伝わっているように見えた。P.S.夜の誕生会、とても嬉しかったです。17歳になった初の夜が一生忘れられない思い出となりました。ありがとうございました。

【作山龍馬】・・・ボルコヴツェ高校では、多くの学生たちが日本に関心を抱き、自らの貴重な知識として、自らの血肉にするがごとく、熱心に学んでいた。地球市民という言葉が示す通り、我々は強く結ばれている。これは疑う余地のない真実だし、その言葉が従来併せ持っていた虚像感も昨今薄れてきている。こうした時代において、我々にはボルコヴツェの高校生のように、相手を理解しようとする姿勢が求められると思う。少しでも多くのことを知ったり、相手のことについて、何らかの経験をすれば、確実に心の「核」の距離は縮まる。それは今後の人生の大きなスキルになるはず。だから僕は後の一週間半、人々の心の「核」に迫っていきたい。

12/16「アウシュビッツ・ビルケナウ強制収容所」見学



「アウシュビッツ強制収容所」入口



「ビルケナウ強制収容所」門前



当時の建物がそのまま残され、遺品が展示されている館内



膨大な数の靴の遺品



アウシュビッツ在住のポーランド人ガイドの方に3時間、詳しく説明をしていただきながら見学

【畠山拓己】・・・アウシュビッツに着くとこれまで見てきた美しい建物とは違う、自分の頭の中にじっとりとまとわりつく狂気的な何かを感じました。ガイドさんの案内で建物内を進んでいると視界一杯に広がっていたのは髪の毛の山でした。学校の教室2個程の面積のショーケースの中一杯です。しかも、その量でたった4日分だとガイドさんが話していました。その他にも、メガネ・靴・くし・かばんなど接収されたおびただしい数の品々であまりの衝撃に寒気と鳥肌が止まりませんでした。こんな場所をこんな若い時に見ることができて逆に幸運だったと今は感じています。平和への気持ちを新たに持ち、残りの期間もいろいろなことを吸収していきたいです。

【佐藤章哉】・・・アウシュビッツとビルケナウでは本当に貴重な体験ができたと思います。特に、当時の建物が多く残っているアウシュビッツでは心に来るものがありました。とは言っても、簡単に言葉で表せるものではありません。この場所で毎日、何百人・何千人の人が殺されていたと思うと、何度か鳥肌が立つことがありました。2度と繰り返してはいけなし、後世に伝えていかなければならないことだと思いました。

【高橋佳弘】・・・アウシュビッツに行ってきました。当時の建物がそのまま残っているため、中に入った瞬間、空気が重く感じました。中には、沢山のかばんや靴などがあり、これは処刑された人のものだったそうです。処刑するか、仕事をさせ続けるかはたったの1秒で決められていたそうで、「人の命を何だと思っていたんだ」と悲しい気持ちになりました。もう2度とこのようなことが起きないように願いました。

12/16-20 ポーランド・クラコフ滞在 ヤギェウオ大学、クラコフ電気工業高校、Manggha博物館訪問 世界遺産「ヴィエリチュカ塩鉱」訪問



世界遺産「クラコフ旧市街」。クリスマスに彩られた美しい街並



日本の浮世絵のコレクションで有名な
「Manggha」日本美術博物館



コペルニクス、ヨハネ・パウロ2世などを
輩出した700年以上の歴史ある「ヤギェウオ
大学」にて震災プレゼン



世界遺産第1号、ヨーロッパ最古の塩鉱
「ヴィエリチュカ塩鉱」内の教会にて

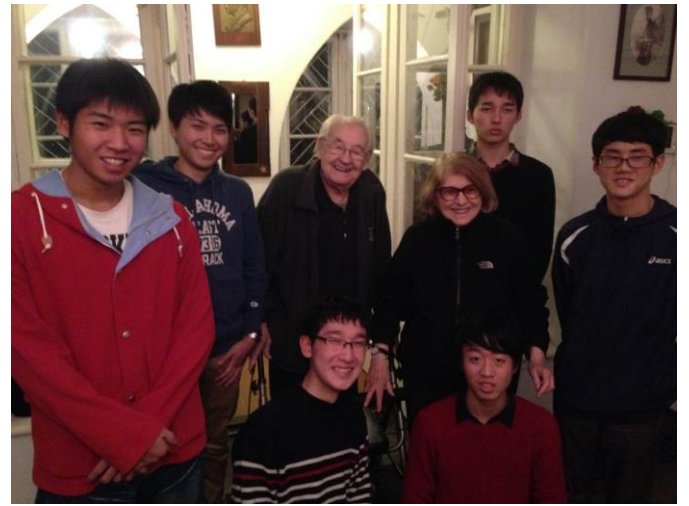
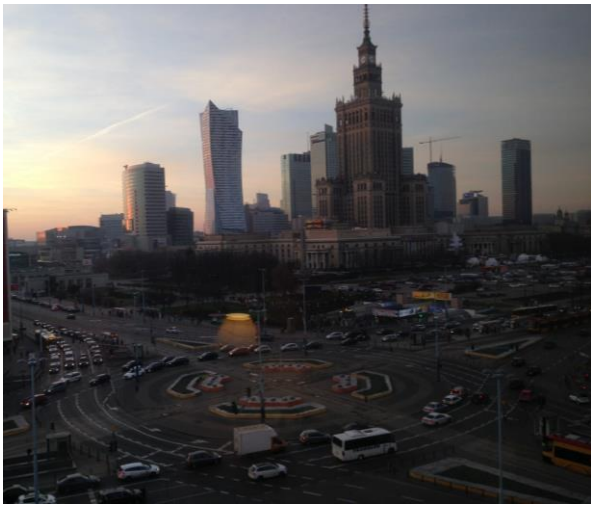


大学・高校・日本語学校などを訪問し、震災プレゼン&交流会

【高橋佳弘】・・・クラコフ電気工業高校は電気などの工業について学んでいる学校でした。私の通っている学校も電気や機械のことを学んでいる学校で、同年代の人が国は違うけれど同じようなことを学んでいることを知り、将来、ポーランド人の方と仕事をする機会があれば、きっと今回のことを思い出し、モチベーションが上がるでしょう。高校生の方は皆、真剣な顔で私たちの発表を聞いてくれました。校長先生はインターネットなどのツールで得た情報より詳しい情報が聞くことができたと言っていて、私たちがやっているプレゼンテーションがしっかりと役に立っているとあらためて感じる事ができました。今もなお、被災地の復興が行われています。あの震災からもうすぐ5年が経ちますが、記憶の風化というものには心配です。そのために今回のように多くの人に震災のことを伝えることができるのは、とてもいい経験です。日本に戻ったら、東北や復興の担い手になれるよう努力していきたいです。

【渡辺理央】・・・「Manggha」博物館では、日本に住んでいる自分でもなかなか見られないような歌川広重の日本画や、ポーランドの芸術家によるポスターが展示されていました。日本画を近くで見ることによってわかる繊細な筆の動きや、淡い青から濃い青へのグラデーションの変化など、日本人ならではの技術力の高さをあらためて感じる事ができました。クラコフにあるバベル城では、生まれて初めてダ・ヴィンチの「白貂を抱く貴婦人」を見ました。真ん中の女性の光の当たり具合から、本当は見えないはずの黒く塗りつぶされた背景が浮かんでくるようでした。世界で一番有名な画家が描く絵には、何世紀という時間が経った今でも最新の技術に負けない、デジタルでは決して表せない美しさがありました。

12/20 「アンジェイ・ワイダ監督」 自宅訪問・インタビュー



「灰とダイヤモンド」「地下水道」「鉄の男」など、強い社会的メッセージを込めた作品を作り続け、アカデミー名誉賞を授与された、世界的名監督「アンジェイ・ワイダ」氏の自宅を訪問



奥様のザッファトヴッチさんの父親は、ワルシャワ復興の父・ザッファトヴィッチ教授。復興についても、沢山の示唆をいただいた



「平和とは生きること」と、平和への熱い想いを語ってくれたワイダ監督

【作山龍馬】・・・我々はアンジェイ・ワイダ監督のご自宅にお伺いし、お話を伺った。ワイダ氏はとても物腰が柔らかく、笑顔がとても素敵だった。お会いする前に、ワイダ氏の映画を数本拝見した。それらは全て社会性に富んでおり、我々の感性を大いに刺激するものだった。文化が歴史において、実に重要な役割を握っていることは言うまでもない。文化は人々の生活また心理の底をとうとうと流れているものであり、我々は非常に影響されている。

ワイダ監督は、映画を通して、映画という文化的な媒体を通して、ポーランドひいては世界中の人々にメッセージを送り続けてきた。その業績は実に偉大なものであるし、後生に語り継がれるべきものだ。インターネット・SNSが普及した21世紀は「発信の世紀」と呼ばれることがある。世界に発信する方法は広がった。私もアンジェイ・ワイダ氏のように世界を変えるメッセージを発信していきたい。

12/21-26 スイス・ベルン、チューリッヒ滞在 クリスマスミサ参加、ウェルカムパーティ クリスマスマーケット探索



12/24 ベルン大聖堂にて、
クリスマスの特別ミサに参加



クリスマスマーケットを探索し、ヨーロッパのクリスマスを体感



12/25 クリスマスの雰囲気にもまれたチューリッヒ。チューリッヒ湖から眺めるアルプスの美しい景色



ユースホテルにて、クリスマスパーティ



スイス名産のラクレットチーズでウェルカムパーティ

【小田和樹】・・・男だらけのクリスマス in Bern！ヨーロッパのクリスマスを満喫できた。午前中からゆっくりとベルン市内を散策し、時計台やクリスマスマーケット、眺めのいい高台といったベルンの良い部分を沢山発見できた。コンサートを聴きに教会へ行くと素敵な歌声が響いていた。何の曲かは分からないが、はもりや美しい歌声を聴き、ヨーロッパのクリスマスを感じた。クリスマスマーケットでは、口溶けの良いキャラメル、アクセサリー、小物といったものが沢山売ってあった。宿へ戻り、ケーキやお菓子を囲みながらささやかなクリスマスパーティ（男）をした。ケーキを食べながら、静かにクリスマスを祝った1日だった。

12/22 スイス・ロシニエール地方遠足 「グランシャレ」訪問 「グリュイエール村」訪問



アルプスの美しい景色に囲まれたロシニエール地方



20世紀最後の巨匠・故バルテュス氏の妻、
節子夫人と懇談



スイス最大の木造建築物「グラン・シャレ」



チーズの聖地「グリュイエール村」にて、本場のチーズフォンデュを堪能

【小田和樹】・・・グラン・シャレに行って、節子夫人にお会いした。

着物姿で出迎えてくださった後、話を聞かせていただいた。元々、グラン・シャレはホテルだったため、大きく立派で、木の温かみを感じた。節子さんとお話しさせていただいて感じたことは、「日本人としての誇り」をきちんと持たれた方であると感じた。バルテュスさんが日本好きだったため、節子さんも日本について勉強するようになり、日本の良さに気づいたと言う。日本国内も欧米化している中、海外へ行き、日本の良さ、着物であったり、精神であったりというものを大切にし、日本らしさ・日本の伝統・誇り・アイデンティティというものをアーティストとして、あるいは、一人の日本人として世界へ発信していた。そのパワフルさ、エネルギーには我々も圧倒された。便利になり日本人らしさが失われつつある今、もう一度、自分の国について見つめなおすべきだ。グラン・シャレの後は、グリュイエール村へ行き、チーズ・フォンデュを食べた。チーズの違いを感じながら非常に美味しいフォンデュだったが、あまりの量に圧倒された。食後はベルトが締まらなかった。

12/27 成田空港・解散式



成田空港にて解散式



2週間の体験を通して、気づいたこと、感じたこと、
考えたことをそれぞれが発表



多大なサポートをいただいた日本赤十字社に
生徒からの感謝のプレゼント

■ご来賓のコメントより

「皆さん、この15日間で、考え方も中身も変わったのではないかと思います。日本の平和の中で暮らしていると、人とつながっているということはあまり感触が無いのかもしれませんが、しかし、日本だけではなく、世界の人達とつながっているんだということを実感されたのだと思います。ポーランドの孤児のお話は、ポーランドでは伝わっていますが、日本ではあまり知られていません。東日本大震災が起こったとき、日本の今までの海外支援が伝わっていたこともあり、世界各国から沢山の支援をいただいています。今回、皆さんが経験されたことを、ポーランドのこともいいですし、ジュネーブの連盟でもいろいろな知識を得られたと思いますので、友達や様々な方に伝えていってもらえればと思います」

大西雅彦 日本赤十字社 総務部 次長

「今回、ヨーロッパの歴史ある国に行ったことは、貴重な経験だったと思います。異文化に向き合って、自分自身を見つめなおすこと。異文化交流・異文化理解の中で、自分自身を成長させること。これからも、Learning by Doingで、頑張ってください」

平野昌和 Support Our Kids実行委員会企画委員

解散式・参加メンバーの感想



【渡辺理央/Planning Leader】（宮城県仙台育英学園高等学校3年）

私は今まで海外には全く興味がなかった。「日本が一番安全だ」「日本人が一番親切で、海外の人はみんなが親切なわけじゃない」海の向こうに行ったことが無かった私が、そんなことを言う筋合いはないのではないかと、今になっては思う。

世間ではよく「〇週間、海外に行って人生観が変わった」という声に対しても、「〇週間で変わる人生観なんてどんだけ薄っぺらい人生観なんだ」みたいな反論が出てくる。今までは私も後者の考えだった。しかし、誰と一緒に旅をするか、誰に出会うのかによって、人生観なんてものはたった2週間で簡単に変わってしまう。私は今回の旅でいろいろな人に出逢った。出逢った人全員に共通して言うことは、全員明確な夢や目標を持っていた。そして、みんな熱かった。日本語を勉強している学生たちからは、私たちも知らないような「花笑み」という言葉を教えてもらった。とても美しい言葉だと思った。学生たちの多くに、なぜ、日本語を勉強しているのかを聞いてみたところ、「日本のアニメ・マンガが好き」の次に多かった答えが、「日本語は美しいから」だった。最初はピンと来なかったが、言葉の意味や習字に見られるようなデザイン性から考えると、確かに美しいなと思った。こんなに美しい言語を使える国に生まれている自分はとても恵まれているなとも思った。私は将来広告や企画の仕事に就きたいと考えている。今回の海外研修のために掲げた目標は「海外ならではのアイデアの種を発見する」だった。私は沢山のアイデアの種を見つけられたと思う。クラコフにある

「Manggha」博物館では、歌川広重の日本画とポーランドのデザイナーによるポスターの対比を見た。広告で大切なことは、一目見た時のインパクトでどれだけの情報を伝えられるかだと思う。しかし、日本画と対比してみると、じっくりと注意深く見ないと分からないようなグラデーションの変化や、筆の動きを知ることができる。広告には、一目見た時のインパクトが大切だが、じっくりと隅々まで見ることによって、やっとメッセージが伝わる広告があっても面白いのではないかと考えた。他にも、スイスのグラン・シャレで節子夫人とお話をしたとき、「日本人は着物という民族衣装があるのにも関わらず、みんな洋服を着ていてもったいない」と仰っていた。確かに、もしも私が外国人で、日本に初めて行き、日本人が皆着物を着ていたらとてもクールだと思うし、もう一度日本に来たいとも思う。ポーランドやスイスの古くて趣のある建物を見ていると、海外に来た気持ちになるし、細かな造形をもっと楽しみたいと思う。日本にはそのような日本的な建物が足りなくなっているのではないかと。観光地などには日本的な建物は多いが、私が住んでいるような地方の街にはコンクリートの何の面白みの無い建物が多い。いっそのこと復興住宅を建てるなら、日本のテイストを盛り込んだものを建てて、観光地にしまえばいいのにと考えた。私は今回の海外研修で多くのことを学び、多くのことを体験できました。SOKの支援者の皆様やポーランドやスイスで私たちを温かく迎え入れてくれた方々には、いくら感謝しても足りないくらいです。私はいつか誰もが知っているようなプランナーになり、日本にも海外にもたくさんの「花笑み」が咲き誇るようなアイデアをプランニングしたいと思います。今回の研修で感じたこと、またスイスとポーランドに戻ってきたいという気持ちを忘れずに頑張ります。本当にありがとうございました。

ポーランドで出逢った皆さん、スイスで出逢った皆さん、また、会いましょう！約束です！！

解散式・参加メンバーの感想



【畠山拓己/Gripper】（岩手県立宮古高等学校1年）

僕がこの2週間を振り返ってみたとき、あれをしとけば良かった、こうしておけば良かったという後悔も沢山ありましたが、自分の発見や成長も沢山感じることができました。

出国前に立てた個人的な目標は大きく分けて3つです。ワルシャワの復興から地元の復興を考えること、たくさんコミュニケーションを取ること、そして、自分の将来の目標を見つけることです。ポーランドの初日に見た首都ワルシャワはとても美しい街で戦災を受けたというのは考えられませんでした。現地で日本語教師をしている坂本さんから見せていただいた第二次世界大戦で完全に破壊し尽くされた写真を見たとき、戦災時の状態から今の状態に復元させるのにどれだけの熱意を持っていたかを感じることができました。ワルシャワに生活している人たちを見ると、みんな先人や自国の文化に対して誇りを持っていて、やはり自分の目指す被災地復興はワルシャワにあったんだと今は断言することができます。地元に戻った時、たくさんの人にこのことを伝えたいと思います。

コミュニケーションを取るという目標は正直成功したとは言えませんでした。僕は昔から英語の成績が低く、英語を聞くとすぐに耳を締め切ってしまうクセがありました。このクセのせいで、交流会の時にさんざん苦しめられました。ただ、アドバイスをもらって少しずつ苦手な英語のコミュニケーションを前向きに取り組めるようになったと思います。

それから、自分の目標を探すという、この目標は成功したなあと感じています。日本でちゃらんぽらんな生活をしている僕と違い、外国で活動している日本人の方々は、何らかの使命感に燃えていて、僕にはとてもまぶしく見えました。そこで、僕は将来海外で日本語教師の仕事をしようと思い当たりました。この仕事なら日本の文化を海外の方に伝えられるし、憧れの地で母国語を教えることができたなら、これ以上楽しい仕事はないと思います。ポーランドで何校か日本語学校との交流会をしてきましたが、やっぱりみんな日本への愛や憧れがとても大きいなあと感じました。自分たちが何気なく見ているアニメにも世界へ誇れる文化で、自分たちが当たり前のように使っている日本語も外国人にとって見れば、とても美しい言語です。外国へ来て外国の文化と触れることでもっと日本の文化理解が深まりました。そして、ポーランドのこともとっても好きになりました。というわけで僕はポーランドで日本語の先生になるという目標ができました。ポーランドへの情熱を忘れないように日々頑張っていきたいです。

解散式・参加メンバーの感想



【佐藤章哉/Icebraker】（福島工業高等専門学校2年）

スケジュール的にも詰まっていた、でも時間的にはゆっくり感じたポーランドステイ。それとは裏腹に、あっという間に過ぎ去っていったスイスステイ。長いようで短い2週間が終わりました。アウシュビッツや国際赤十字本部を訪れたり、震災プレゼンテーションをしたりなど、様々なところで「平和と復興」について考え、学びました。ポーランドは戦争で人口が激減しました。街は破壊され戦後はそのままソ連に飲み込まれるという暗黒時代がありました。私たちはそんな時代を乗り越えたポーランドを見てきました。そこには親切で明るく生きている人々がいます。震災プレゼンテーションの後に、「福島に行きたい」と言ってくれる人がいました。「高校生に何ができるんだ」と思う人もいると思います。実際に自分のしたことは本当に小さなものかもしれませんが、しかし、いろいろなところでプレゼンをしてきて、少しは福島に対しての偏見を取り除くことができたのではないかと思います。ポーランドには、私たちと場所は違えど、日本のことを広めている方がいます。だから、私たちは日本で思う存分に東北を支えていくことができます。もちろん今回だけではなく、これからも福島のことを広めていきたいです。2週間を終えてあらためて気づいたことがあります。それは「出会いを大切にする」ということです。いろいろな人と出会い、つながりができました。沢山の友達もできました。「今度ワルシャワに来る時はホテルの予約はいらないよ」と言ってくれたホストファミリー、一緒に話をしていると「自分が日本との架け橋になりたい」と言ってくれた現地の学生。スケジュールを立てていただいたり、案内をしていただいた現地の日本人の方々。挙げればきりがありませんが、出会いの分だけ、つながりが広がっていくんだなと実感しました。今回の出会いを生涯大切にしたいです。

私たちにはひとつ考えたことがあります。ポーランドでワルシャワ日本語学校というところに本当にお世話になりました。一緒に街を探索してもらったり、ポーランド最終日には一緒に夕食を食べました。今度は私たちが東北に招待したいと思っています。明確なことは決まっていますが、必ず実現させたいです。男8人の旅でしたが、本当に楽しかったです。この6人でしか作り出せないものがあったと思います。この6人で旅をすることになったのも何かの縁です。ここまで来れたのは決して自分一人の力ではありません。今回のような体験をできたのも、SOKはじめ、関係者の方々などのおかげです。ありがとうございました。自分はたくさんの人に支えられて生きているんだなと実感した、そんな2週間でした。今度は私たちが誰かのためになる番です。

解散式・参加メンバーの感想



【作山龍馬/Doctor】（福島県いわき秀英中学校3年）

終戦から70年。その節目でもある今年、夏には戦争に関する番組が多く流れ、安保法案に関する話題も盛んになった。そもそも「平和」とは何か、平和に寄与するためには、日本、しいては我々は一体何をすべきなのか、こういったことを考える機会も多かったのではないだろうか。我々は、第二次世界大戦時の負の遺産として著名なアウシュビッツ強制収容所を訪れた。アウシュビッツはドイツのナチ党が、ユダヤ人虐殺のため作った施設である。強制的に連行されたユダヤ人の人達は、強制労働か、毒ガスによる虐殺かの判断をされ、虐殺の判断をされた場合、数日から数カ月以内にガス室で虐殺された。実際にアウシュビッツを見学し、様々な痛ましいものを見る度、私の心の中には何とも形容し難い悲痛な感情が生まれた。とてつもない重さのあるその感情を、私はなかなか消化できなかった。ユダヤ人の人々が奪われたバッグ、靴、髪の毛……。それらはただ無常にそこに佇んでいた。また展示されていた写真に映るユダヤ人の人たちの顔は、これから何があるのかわからないと言うような戸惑いを隠しきれないものだった。それがまたどうにもやるせない。私が思うに、アウシュビッツは、日本にある大半の戦争に関する遺産とは、根本的に違うものを持っている。それは何か？それは、日本の戦争遺産には原爆ドームのように破壊された後のものが多いが、アウシュビッツはそのまま戦中にあった姿であるという点ではないだろうか。原爆ドームのような、破壊され、原物をほぼ無くしたのを見ると、人々は戦争の破壊力の強さ、また、悲しさを痛感する。一方、アウシュビッツのように、原形をとどめた遺産は、その場で死んだ人の無情さ、やりきれなさを強く我々に与え、不気味な感情をもたらす。それは今まで味わったことの無いような負のエネルギーを持っており、その場に行ったものしか感じられないものだ。終戦から70年。10代の我々はもちろん、親の世代ですら、戦争の経験はない。戦争の恐ろしさを知る人は、戦後80年、90年、そして、100年へと経ていく中で減っていくに違いない。そんな状況下において、今、我々は、戦争の吐息をかすかに感じた。そこからどのように考えを深めていくかは各々の問題だが、ただ、確かなことは、またひとつ我々が貴重な経験したことだ。我々はこの芽吹きを無駄にしてはならない。一本のペン、一冊の本、そして一人の子どもが世界を変えることができる世の中なら、なおさらのことだ。

解散式・参加メンバーの感想



【高橋佳弘/Franker Leader】（仙台高等専門学校3年）

2週間のステイで様々な経験をしてきました。全く知らない場所での研修、男だけのグループ構成、異文化・異言語など、出発前にはとても不安になりました。ポーランドの旧市街の雰囲気はとても良く、建物はレンガ造りで、とても戦争で一度破壊された街だとは思えませんでした。街の中では馬車が走っていたりして、タイムスリップしているような気分でした。ポーランドの料理はとても大きかったです。ソーセージのようなものを注文したら、日本のソーセージの約2~3倍の太さのものが2本も出てきて食べるのが少し大変でした。アウシュビッツでは、一歩足を踏み入れるととても空気が重く、悲しい気持ちになりました。ガス室にも行き、そこはもう今までとは何かが違う様子でため息しか出ませんでした。もう2度とこのような悲劇が起きないようにしなければならなかったと思いました。スイスはとても食べ物がとてもおいしく、特にチーズがおいしかったです。ラクレットチーズやチーズフォンデュなど日本であまり食べないものが食べることができて良かったです。クリスマスはスイスの教会に行きました。とても神聖な様子でした。日本とは違いヨーロッパのクリスマスは家族と過ごすため多くの家族が街にいました。

ポーランド・スイスでは震災のプレゼンテーションを行いました。ヨーロッパでは地震があまり起きないため伝えるのは難しかったですが、震災の写真を使ったりして、地震や津波の怖さを伝えてきました。聴いている皆さんはとても真剣な表情で、伝えることの重要性がよくわかりました。2週間の間に、沢山の人間と交流をしてきました。熱心にサポートしてくれる方、優しくサポートしてくれる方、現地の中学・高校・大学の学生たち。皆それぞれ個性豊かで毎日がとても楽しかったです。その人たちに会ったことでたくさんの思い出ができました。2週間というのは人生という長いスパンで見れば一瞬の出来事なのかもしれませんが。ですが今回の研修の2週間は私を大きく成長させてくれたとても価値のある2週間であったと思います。帰国後、私は地元の復興のために何か小さなことでもいいので参加していきたいと思います。ポーランド・スイスの皆さん、大変お世話になりました。

また、いつかどこかで会いましょう。本当にありがとうございました。

解散式・参加メンバーの感想



【小田和樹/Closer】（岩手県立久慈高校2年）

2週間の研修を終え、充実感と共に寂しさや悔しさといった沢山の気持ちを感じている。それだけ中身の濃い充実した2週間だった。私は今回のステイに参加した理由が、「自分にできる復興をする」ということだった。私自身、震災では、直接的な被害は受けていない。だが、生徒会やボランティア活動を通して、自分にできる復興とは何か？を考えるようになった。たどり着いた答えは「忘れないこと」「伝えること」「今自分にできることをする」ということだった。忘れないためには「伝える」必要があり、今、自分にもできることだった。よって、伝えるがひとつ私の中のテーマとなった。伝えるということを目標のひとつに掲げたが、言うのは簡単で実践するのは、死ぬ程難しく、悔しい想いをした。今回のテーマに「復興と平和について考える」ということがある。アウシュビッツを訪問し、ワイダ監督にもお会いした。共通項は「戦争」。アウシュビッツは独特の雰囲気、70年前までここで多くの人々が殺されていたかと思うと、ゾッとした。遺品は生々しく、エピソードも非常に残酷だった。これは実際に目で見ないとわからない。言葉では伝えられないものだが、忘れてはいけないし、実際に足を運んだものとして、語り継ぐべきだと感じている。ワイダ監督も戦争を経験された方だ。戦災に巻き込まれたポーランドにいて、父が虐殺にあい、戦争や平和について強く考える一人だ。優しい温かみのある声で笑顔が素敵な方だったが、戦争について語る時は力強かった。監督も戦争を経験した人間の一人として映画を通して伝えることをしていると考えた。終戦から70年が過ぎ、戦争を知る人も減っている。語り継ぐことができる人がいなくなりつつある。危険なことである。同じことを繰り返すことになる。震災に関しても震災を知らない世代が生まれ、ゼロから教える。ゼロから伝えるというのは今回のプレゼンテーションと同じだ。上手く伝えられなければ、同じ過ちを犯すことになる。それくらい重大なことを我々はしていたのだと感じている。伝えたことが全部伝わったとは思えないが、少しでも日本や震災について覚えてもらい、その人が伝えることをしてくれれば、私の今できる復興は、少しは成されたのではないだろうか。今回、海外で活躍されている日本人に沢山お会いした。どの方々も何かのキッカケがあって、海外に来て、活躍されていた。さらに、どの方も、強い意志・想いがあった。私は、皆さんの思いに触れられ、とても良い刺激になり、この方々のようになりたいと強く思った。負けないように、今は日本で大暴れしたいと思う。今回、我々6人は、間違いなく、ポーランド・スイスステイという名の戯曲の「主役」だった。沢山のスポットライトを浴びて、全力でパフォーマンスをしてきました。私たちがスポットライトを受け輝いている後ろには影ができます。影のおかげで光がより輝きます。つまり「おかげ様」です。沢山の方々の支援があって、沢山のものを見て、学んで、感じて、帰ってこれました。このチャンスを下さったSOKの皆さん、支援してくださった方々、現地で様々な手配をしてくださった方々、本当にありがとうございました。私たちは、今、復興も、これからの日本も、人ごとにできない年齢になりました。課題は山積みです。今回の仲間の中には、未来のビジョンがハッキリしている人もいたし、皆、しっかり物事を考え、「自分」を持っていました。負けられない。切磋琢磨しながら、これからの東北・日本を背負っていきたい。これからの日本を、私たち「主役」にまかせてください！

補足資料① * 募集アンケートより～参加生徒分～

赤十字の活動についての印象を教えてください。

私は、日本赤十字社の活動は、日本にとって無くてはならない存在だと思います。東日本大震災の際は、日本赤十字病院の迅速な対応により、多くの命が救われました。他にも、海外での国際支援活動では、ネパール地震災害現場での保健医療チームによる救援活動や、フィリピンでの学校再建、修復事業など、精力的に活動している印象を受けました。

赤十字の活動についての印象を教えてください。

赤十字と聞いて一番思い出に残っている事は仮説住宅にあつた家電や支援物資のほぼ全部に赤十字のマークが入っていた事です。
今だにとても感謝しているし未だに冷蔵庫は使わせていただいています。

赤十字の活動についての印象を教えてください。

私は小学校の時に、ボランティアの委員会に所属していたため、何度も赤十字という言葉と耳にすることがありました。その時は、献血や看護などの病院のイメージだと思っていました。しかし、震災以降、テレビなどで取り上げられる赤十字の活動を見て、ボランティアなど世界規模で行っていることがわかりました。今では、世界規模で行われている「助け合い」という印象ももっています。

赤十字の活動についての印象を教えてください。

赤十字の活動は災害が起こったとき、その現場で救護活動などの支援を行っている組織であり人の健康を考えている印象があります。これは日常生活を送っていくには欠かせないと思うのですばらしいと思います。
また、私たちの生活を支え、命を救い、人を育てるというなくてはならない大事な組織だと思います。

赤十字の活動についての印象を教えてください。

百年以上前から戦場等で活動していて歴史のある団体なのだと感じました。
現在は献血や医療、災害時も様々な分野で活動している幅が広いと感じました。

赤十字の活動についての印象を教えてください。

医療面での国際社会への貢献が、とても印象深いです。特に内戦や地域紛争が多い現代、その活動は以前にも増して重要性を増していると思います。

補足資料② * 募集アンケートより～志望動機など～

1 志望動機（具体的に書いてください）

動機は主に以下の二点です。

i) 「平和」について考え、今後の人生に向けて、大きな経験を得たいから。

今年、我が国は戦後70年を迎え、「平和」について考える上で大きな契機となる年でした。今、イスラム国等 国際的な秩序が大きく揺れる中で、我が国が世界の「平和」に貢献するには何をすべきか。そもそも「平和」とはこういった状態なのか。こういった事を考える上で、世界的に「負の遺産」として著名なアウシュビッツ、現在、医療面において、世界平和に大きく貢献しているとされる国際赤十字について学ぶ事は極めて重要であり、私の今後の人生にも少なからず有益な事が見出せるのではないかと私は考えます。

ii) 「復興」について、自らの考えを深めることが必要だと感じるから。

東北に生まれた私にとって、東日本大震災からの「復興」は大きな懸念であり、一体「復興」とは何をもって完結するのか、こういった事が「復興」にあたるのかという事について、まだ私は漠然とした考えしか抱いていません。私は今回、同じ東北出身の参加者の方々と交流し、様々な考えに触れる中で、明確な考えに辿り着けたら、と考えています。

4 震災後、あなたの中で変わった価値観や考え方があれば教えてください。

震災後、私の中では人とのつながり、ボランティアに対する気持ちが強くなりました。私の家族は、地震が発生した次の日に近くの中学校の体育館に避難しました。そこでは、先生の方々が対応してくださり、消防団の方々が炊き出しにきてくださる日もありました。数日、体育館で過ごし、原発の放射能事故を考慮し、福島県玉川村の公民館に避難しました。ここでも、職員の方々が対応してくださりました。時には、近くの旅館の温泉にバスで送迎してくださる時もありました。中学校の先生や消防団の方、公民館の職員の方々にせよ、自分たちと同じ被害を受けたという立場に置かれているというのに、自分のことを避難してきた人々を温かく受け入れる姿に心を打たれました。そして、今度何か助けが必要としている人がいるときは、「自分が人々を迎え入れる立場になりたい」と思うようになりました。

4 震災後、あなたの中で変わった価値観や考え方があれば教えてください。

震災後のボランティアやワークショップを通じて、ここからの復興を担ってゆくのは私達ということを強く感じました。そのため世の中の事に感心を持ち、自分から今できることは何かということを考えるようになりました。そのため、自分から今出来ることを全力でやるよういかにしたり、復興に関わるボランティア等に参加するようになりました。